



第四

能林己技集

及下

墨田
大塚
之
田

~ 5
1257
4



へ5
1257
4

五月

・さつき・月見ぬ月・徳月・仲夏・茂林・夏至・芒種
 ・菴宿・異月・早苗月を略し下まゝと云ふ律菴宿
 よいなる申名
 月の名々々



いへり物たるをらぬ五月九日 由松
 ありのるをよるをり五月廿 下廿十條
 神垣の清し暎たりと傳き出、雨共
 長いなるよるのり、五月の末 舟之極
 いへりしく、日を羨るるをり、山社
 極るる、是をよるをり、五月、常時
 賀茂の足揃 朔日競馬の
 ありありあり

面白く青く賀茂の足とらた 孤什

智の仁も持小宮儀と足持らひ 祐之

せりけりし何れもよりの足持し 姫月子

松本祭

一日江州大津 松本よりあり 獻菖蒲 三日あり左右の延閣兵衛門の階の

東西より又時の花を

菖蒲茸

四日三夜寮家より

供早瓜

四日内膳司早瓜を供す山城の園と園の供

五日の節會

何れめのかつらあやめれ祭天皇武徳殿より出所ありて宴會を外もせしむ臣は酒を給ふより人々皆何れれり

をり典葉茶ある也の葉を

端午の節

五日ありけりちちを食するよりあり 公 終六川端を花より所所へ調進するよりよせりの葉の名物あり

重五

五月五日の故に重五と云又端五ともいへり五月の月あり

菖蒲

五月五日の故に重五と云又端五ともいへり五月の月あり

昆明の百毒の菖蒲の根万病をいれし由是百毒をけし世より是を根へり酒の中へいせ或ハ常より一或沐浴へ入侍るもの本天よ

軒のやめ浮世の露をまろの危 兔得

傘の柄も年々のつとをぬ菖蒲式 甘志

着るや何れもよ風のまきい 見外

さやいふ幸かハる何れやめ 下 麦 香

刈口も和のうら赤きさうぬりれ 重接糸

山門のきく、ぬふふくや雨ゆり 六季山

暮るくらの家家ふきりり葛蒲賣、雪山

葛蒲湯

鉄湯を沼にアヤ、る葛蒲汁、其角

葛蒲刀

要五首童子の祝ひよ葛蒲刀とて、太刀長刀を本よそ作り
是をこそいひくさのさすきをさすきり、之は山賊ふ後の毒の
そりをもひひして、中なりと云りは、さつりよ
今も、ちんちんのやりの武者さすきり

手傳ふり、接ぎ葛ふや葛蒲太刀 雪駒

飴兜

昇る月の下り、はく、勝り、のぬき、越山

葛蒲幟

幟をよよきく、のり、小坂りぬき、老

薬日

神風のきく、しらめ、幟のき、ぬ白

手をとり、さる、幟のき、静、

何の中、遠をき、初、のほり、接糸

遠のき、白の白、白き、幟、のぬ、後松

舟、糸、る、魚、を、町、中、幟、牧、珠、徳

薬玉

贈、くさりの玉、きり、玉、長命、續、命、續、命、辟、兵、繒、
續、命、五、彩、系、法、病、必、五、月、よ、お、ま、る、故、よ、ふ、葛、州、を、五、色、の
糸、よ、を、調、了、し、お、く、お、六、色、糸、を、た、ら、ふ、糸、を、文、よ、也、世、お、の
葛、ふ、を、玉、お、き、り、何、お、め、と、う、め、も、秘、心、結、り、是、ら、り、ふ、を、利、る
何、お、ま、る、へ、一、ち、ち、ち、を、さ、り、お、か、あ、や、め、も、也、也、也、也、伊、よ、何、り、夫、
よ、い、ち、ち、の、糸、よ、お、り、何、お、ま、る、や、ま、の、き、の、玉、く、け、よ、の、ぬ、り、これ
を、い、ち、の、糸、よ、り、風、長、命、續、命、續、命、續、命、い、ち、五、兵、を、辟、す、ゆ、急、り、
辟、兵、繒、よ、く、初、よ、の、條、を、い、ち、は、也、也、也、也、

藥

日

五月五日
を
かく云あり

葉玉の風よあつゝの廣き
葉玉の吹めきこえて葉の蔭き
葉玉のやの糸一糸の灯のうら
葉玉のやをそら心か有伸られ
葉玉の風よあつゝの廣き
葉玉の吹めきこえて葉の蔭き
葉玉のやの糸一糸の灯のうら
葉玉のやをそら心か有伸られ
葉玉の風よあつゝの廣き
葉玉の吹めきこえて葉の蔭き
葉玉のやの糸一糸の灯のうら
葉玉のやをそら心か有伸られ

葉葉子

米鳩

芳州

花海

糸如衝

下井文耕

下毛單次

優

藥草摘

葉玉の風よあつゝの廣き
 葉玉の吹めきこえて葉の蔭き
 葉玉のやの糸一糸の灯のうら
 葉玉のやをそら心か有伸られ
 葉玉の風よあつゝの廣き
 葉玉の吹めきこえて葉の蔭き
 葉玉のやの糸一糸の灯のうら
 葉玉のやをそら心か有伸られ

下六葉山

下廿葉花

台ヒ桃須

糸如

下士敦

下市徳

下子布

下長

下命延

艾人やらやめ蒿する門のうへ 優く

艾 虎

増出せる唐の蓮より席を造り思豆を造り或ハ
色々の葉より小席を造り艾の葉より席を造り或ハ
了非草を造り

いふきよ日白ふ艾席くれ 茶枝子

ふきよ日白ふ艾席くれ 茶枝子

いふきよ日白ふ艾席くれ 茶枝子

いふきよ日白ふ艾席くれ 茶枝子

いふきよ日白ふ艾席くれ 茶枝子

いふきよ日白ふ艾席くれ 茶枝子

削掛の胃

むの一 蓋古の夷吾國をあらわしんせよとて
我しをあらわす例より甲胃を帯 兵具を調 旌旗
を造りしものやうに蓋古を今俗
おもうことあり

粉團を射る

増清粉・水・白粉・唐の宮中より端五より粉團子
を造りしものやうに蓋古を今俗
おもうことあり

桃印箭・赤印箭

増五月五日のちとせらるるのきぬよ篆文の
箭を造りしものやうに蓋古を今俗
おもうことあり

人の泣くことあり

百草を戦ふ

増出せる端五より色々の葉を合せし穂原を
造りしものやうに蓋古を今俗
おもうことあり

中事後につのき引りり印地歩、其
お引よきりておきり印地歩、父母
親も子といひまれを印地歩、
強めきりて印地歩、印地歩、
おらついで子孫を印地歩、
おらきりて印地歩、
おらおらきりて印地歩、
遠く居る油所を知らず印地歩、

神水

心腹の積弊を治す

神水や志をいへばおらきりて

神水や種をおまよりに出る

神水や常々おまよりに出る

加茂の競馬

木の下うらな後負

系接くもせこのやうに魚馬 其心

何れもきりておまよりに出る 上元 祭堂

馬 外

藤の森祭 五月廿日 武者腰馬武者敷多甲冑を著し旗さし

藤の森祭

五月廿日 武者腰馬武者敷多甲冑を著し旗さし物をもて鉦鼓を鳴らし神宝より大さかきしりて

巖重よりけりけりて氏子の町とを神幸あり

五月の鏡

端午は銅を練て宇治祭 八日きんろうといふ子を

今宮祭

九日今廿五日皆神あり室の明神祭 十三日

両社祭

廿三日近江國坂本

有無の日

廿五日村上天皇の御忌あり室中よりけりありの日とありや夜勤日とけりされしは政おまをを侍りて又急りありけりありは政ありけり

みぢの日和 國ふりのけりしは 文種

けりけりの日和 幸よとあり鐘の巻 依女

そよけり日和 傍よとあり里第 下サ一亭

有るよきけりありの日 結界あり 素月

風やけりよきの日 小あをむしけり 小高

けりありの日 小娘のよめ見ええ 飛海

けりありやありの日 結界あり 天燈

有る日のよき 塔屋のけりあり 氏仙

けりありの日 一とせの結のけりあり 上サ梅雪

取勝講 賑給

清原殿にて初なる徒(徒)は儀序と云ふりあるも決りあり
年中好むより五月のこれなりとあるは是なり
〔を〕出舟六日第一き民よ米路あるをよふふある中條の條り
小路を分る檢非使違承を是をいふ

賑給や舟のりの人を立中し里 藁粒
賑給や蟻のつぎ一蟹の毛 下サ 赤岳
賑給や人の中より人の出る 米菰
賑給や舟のりあるより一蟹 倉 龜成
賑給や舟のりあるより一蟹 粟成
賑給や舟のりあるより一蟹 尾村

竹植日

五月十三日竹植日と云ふ又竹迷日と云は日休を裁き
いひあるは是なりと云ふ也

竹植る人今雨間日暮り礼 桑云
是一人よりのむ竹の植場なり 吳城
今種一竹の志ありはむをいし事 嵯風
竹植る竹のりあり 菅麻う事 六月忌
裁つ事ありと云ふは竹の志ありと云 伊乃徳
竹う多なる事ありや百ありやぬ庭 粟成

住吉御田植

女八日務御住吉 大原志 女八日あるを云
神社住田の名 女八日あるを云

山田御田扇

〔獲〕大神字の住田の名は五つある扇を法くす持の
先よつ事あり神官ありを云ふは人の植る

よつ事あり
名あり

山形もやつを日あそびを田原 溪高
田のあそびも今つるまをて田原 振月子

芒種の節 五月の中より

夏至 阿らほの空をてなぶのころなり 優く

梅の雨 ツクリ 微雨五月の暮より廿二の日の日より梅雨と云う 困
阿らほの空をてなぶのころなり

阿らほの空をてなぶのころなり 魯心

梅雨の空をてなぶのころなり 巨月

入梅の空をてなぶのころなり 由之

阿らほの空をてなぶのころなり 春分

五月間

飯初の時をてなぶのころなり 下名 修徳

阿らほの空をてなぶのころなり 春分 飲月

仲夏の時をてなぶのころなり 優く

五月の空をてなぶのころなり 海了

五月雨や池の空をてなぶのころなり 糸 漁藻

五月の空をてなぶのころなり 了 麦冬

五月の空をてなぶのころなり 春分 京平

五月の空をてなぶのころなり 了 甘志

五月の空をてなぶのころなり 了 楽心

五月間

五月間

五月間

きみもや仲の果きの時あり
下毛 雲 龍
伸よまよ宮先くらり
五月雨 五月 歩月
おろくやお山あきさつき晴
悠 測
七夕よおのぼるあまの五月晴
古 祇 白
物よまよけしきあつや五月晴
上毛 為 物
おのぼのしきあつや五月晴
舟 山
あつや五月晴
淡 島
遠きあま星よこえり五月晴
暉 光
川下よ細らるきや五月晴
冬 結 植 子

五月闇

しんくしんくきや五月晴
エチコ 子 布
黒岩の雲はつりや五月晴
葉 居
史の巻も人ハ何しきや
上 取 月
星稀よ五月の雲は白し
ヒナ 淇 水

黒 船

白くく滑梅雨中の定合を云あり
登ハのきこりして今
よの陣やあるやのうちよ又あつりきある
或は黒く
とひよ又小雨ありあつらおのきをせん
と中をさしきこりて白く
とらふよや夕やこよきこりて
一ききうをれてあつらある
を夕まよこりてあつら
あつら

黒くくや夕やこりて
漁師町 黒子子
黒船や波よこりて
沖の島 乙 也

思ふ人やいふ心てさるる葉の里 下舟 春岳
 くはさくや葉のうらめしき磯の松 樹石
 思ふ人よも寐のまじくよき 下舟 誠
 思ふ人よも水子のくれを白き 水岳
 白船やいふ舟遅き佐屋泊 下舟 交
 思ふ人よも増屋りのまじく降漏り 下舟 岳
廿八日舟遅成りくはさく日ありて妻席にお然
 傷せしあまの降をさくくはさく
 叶未より人をぬきもや席の雨 一重
 田はるのり出する降あり席の雨 一重

白船

虎の泪の雨

思ふ人よもいふ心てさるる葉の里 下舟 常晴
 今の世もまじく思ふを席の雨 子布
 葉の降を志すもいぬやうの雨 下舟 湛水
 葉の降を志すもいぬや席の雨 下舟 河曉
 常あまぬ日ありてさるる雨 下舟 秋月
 思ふ人よも傘のまじり席の雨 下舟 電光
 祇園の御輿洗 三十日あり
 てさるる人よも思ふの心をさるる 下舟 庭花
 思ふ人よも思ふあまのしと競ふ 由像

祇園の御輿洗

世傳のこころをいふものなりけり
名をいふかゝるるはあつたれ 蓋然

魚通ふるはるるをいふものなり

半分の干しをいふものなり

申酉の花

園さうさういふものなりけり
あり 筑紫の佐のめいものなり云々

さうさうの花をいふものなり

はるるをいふものなり

さうさうのものをいふものなり

申酉の花をいふものなり

さうさうのものをいふものなり

藤花

梅

左

葉

其

梅

雪

藻

丁刻をいふものなり
刈割る藻や押あはええのり
あつたる藻の下やをいふものなり

新海をいふものなり
藻の葉をいふものなり

藻の花
藻よといふものなり

うきやをいふものなり

うきやをいふものなり

うきやをいふものなり

藻の夕暮をいふものなり

藻の花

竹

舟

鳥

友

橋

民

雪

田

風

百合

・しめゆり・さゆりの花・鬼ゆり・村多ゆり
・うたこゆり

岩をぬくよつとて百合のさゆり代 巳 隨

竹ふえんは是とて千の葉にけり百合の花 廿 葉

岩をぬくよつとてさゆりの花 卅 竹

百合の花はさゆり風や麓城一 三 交

紫陽花

・四つ葉の花

紫陽花や古無一葉さゆり代 古 波 踏

花のさゆりや河内えあらはさゆりの光 古 篠 全

紫陽花やさゆりよつとてさゆり代 古 梶 山

紫陽花のさゆり花さゆりや秋さゆり代 尾 村

花のさゆりや雨の降よけを 古 哉 山

紫陽花やさゆり花さゆり代 京 然 池

あちさのさゆり花さゆり代 雨 誠 之

紫陽花や花のさゆり代 菓 吹

紅の花

・本指花

城下よさゆり花さゆり代 菅 磨

田んぼのさゆり花さゆり代 下 子 順

花のさゆり花さゆり代 紅の花 一 壽 山

揚花人よききつとまやわりの花 ムサシ 如也
 花揚を雨甘の日の花 イハ 山
 眼の中をうつるの思ふありわりの花 チノ 月
 昇る日や揚を露けき紅花 上丹 雨相
 花もまよふに何ぞ我名よきわりの花 赤 月

花菖蒲

梁の武帝の母張氏菖蒲をみる花を生きて光彩照
 灼より世より愛よあり傍人より見よ白雲て了ん
 多老やのまに富貴あり命一依てよりまをを春は月武帝を
 望む 花菖蒲ハ白菖の属あり其葉水菖蒲より細く色淡青
 色を帯び葉は五月一茎を抽き葉端より花を生
 ずるも葉の背の赤く葉淡むるは花淡紅白木の散りあり
 花をよみ一葉水菖蒲より細く花をよみよき花をよみ
 菖蒲と云一種花のやれよとよとのあり別種也

嘉永元年甲子(一)花菖蒲海防(一)雲々(一)てはく(一)は戸部田川の
 東堀切と云る里ハ其内ノ名高く見物の人一原集せり

花の眼よきんくしむさうぬ 不潔
 揚花のうへもあつて花さうふ ハセ 北長
 散りて花のやう花を花菖蒲 下丹 東有
 花はよ波よゆもや花さうふ、 右部然
 花のうへもあつて風あつて花さうぬ、 十條

ハナアヤマ 紫羅欄花 因 花史は白菖 因 二種あり一種ハ花序は生一根本は
 肥白く葉味あるかの白菖をより花は是を泥菖

未央柳

【圖】一名金糸柳花をよみよれて黄あり俗に六柳の字を
よみよ及ぶまじりやうのそよもいふべし

日のさそふそむの河のほしき糸柳 合 言

杏子

陸えの唾をしのせらるる杏子代 合 後

枇杷

枇杷の實や僕もきき枇杷も 合 祐

跡きれと枇杷のちりもき葉陰 合 白

見たりめの日は黄いりしを一 合 佳

枇杷のそや河のそむの葉 合 氷

夏菊

夏菊や換りの中 合 然

天蓼

白き花をいしとく梅のまよひと
俗に梅と云

根布きくは夏菊の河 合 蓬

天蓼の花や日蓼の即 合 優

十薬

十薬の咲や田 合 由

覆盆子

木いちこ・えをいちこ
くちまらち

馬換りよとる葉の 合 玉

山と長きぬいちこの 合 二

葉きうふあてう 合 米

持やうまらく 合 友

早松茸

花より早く子孫をせしむ早松茸 下サ葉弓
雨の早乾えて送るたり早松茸、精中
等葉より早くぬ味あり早松茸、其岳
志留し新く出さる種之早松茸 金不二丸
味越えて出さるの汁や早松茸 花は

蕈ヒコ

夏あり佛子やうと云是あり聖霊云は和合物中へ
佛あり佛の聖菜あり困る種あり和合の蕈ハ四種之
赤根菜種蕈あり出さる蕈ハ
ふ種あり

あまのりふ種蕈のつらさ蕈の味 是遊
人さすめぬ早松茸の早松茸 蕈をさす
優と

馬齒莧スズリヒコ

蕈の馬の齒よりなり
ゆきよ名よき

茄子

根をたたくといく日種より危きなり蕈 葉種
あつても是ぬ間よ種ふ茄子なり 一止
をさすくたきく志るの茄子の味 波流
あら種ありししてえさるや初茄子 三不退
苗より早く種しりる茄子 文種
おろしききり物いめつらき初茄子 一飛友
新種の新しき種ありるや茄子畑 一遊皇
いささく入るきききききの初ありし 下井 玄 融

草
葉
種
文
種
一
遊
皇

青梅

子子梅神の挿の咲よ希り 花凋
花咲てまよき挿の希り
花連枝と挿よ希の咲よ希り
花の香風もまよき挿の希り
花連の希りもまよき挿の希り
青梅や花の香風もまよき挿の希り
青梅や花の香風もまよき挿の希り
青梅や花の香風もまよき挿の希り
青梅や花の香風もまよき挿の希り

李

楊梅

上総の山中よ希り

花月
佳音
相左
龍得
古杉風
古奇剛
下廿五
花月
佳音
相左
龍得
古杉風
古奇剛
下廿五

若苗

吹雪のふりしむとこのくま苗上サ五英

若苗や花よある木の枝を伐る下サ玉碩

この苗の老よも初や子孫おくる 優く

青田

やまよふらとくふ島の青田うれ 影左

眼よ黒く老のまじりく青田うれ 等裁

二三投おまのふよも青田うれ 真哉

けりまよふ花相う赤あつ青田うれ 秋心

顔よ月影さして足きれぬ青田うれ 古一曼

月花のふよも青田のまのめりれ 六楼山

毎月のうらつる青田のまのまきうれ 下毛 後麦

麦刈しつる青田と花よあり 花船

まゝくしと秋のめくくする青田うれ 暉永

川裁しよ青田えんを堤うれ 庭彦

横よまの目さつるはらし田子取 龜将

志れしとおひよ自井や田州一石 山重

汗まてら流るちあり田まると里 不由

粟蒔

・釋・拒・胡アおまくとこの五月に
刈る八月あり

粟蒔や目の後まこのう一をらと 成月

菽植

粟あはきやあはき志しににきき山さん根こん 畑はたけ 優よく

酢すやすののままささくく地ちははああくく蘇そららるる 文ぶん 種たね

蘇そららるる場ばをを買かひひ地ち瓦わうう孔こう 田いり 谷や

蘇そららるるののまま中ちゆうくくふふあありり危い蘇そららるる 上かみ 梅うめ 雪ゆき

空菽曳

空くう豆まめをを曳ひくく大おほいいくくままくくけけうう孔こう 危い 花はな

子こののままささくく空くう豆まめ曳ひくくのの身みああららくく 全ぜん 龜かめ 成なり

省しやう戸こ也や空くう豆まめ引ひくく毛もうふふききけ 花はな 海うみ

空くう豆まめやや畑はたけののああららままははくくままああるる 麦あわ 烏くろ

繡線菊

園木とまゝ三種ありとも五月迄花をひらく真紅
淡紅ゆりまねのを此をまゝく花の形はうんじんは此

集り咲りよふよふを花をまゝく
今危よりある

志しののつつ中ちゆうのの毛もうをを相あののままくく黄わういい危い 優よく

夏草

夏なつ草くさののららききふふままままやや通とほりり 雨あめ 連れん里り子こ

夏なつ草くさやや通とほりりをを通とほりり目めけけるる 烏くろ 子こ 子こ

夏なつ草くさやや畑はたけののままくくいい危い 末すえ 呂りよ

棟花

園梅種とくは誤ありせん然ハ種名之棟の字の付も
優あり棟ハぬきとくは白膠木のゆあり

ととくく大おほいいくくままくく雨あめのの棟たてうう孔こう 瑶ぎやう 美み 子こ

花はなののままははままくくままくく棟たて 末すえ 呂りよ

雨あめののああららくくままくくいい危い 棟たて 碎くず 内うち

宵行

園田の量五月の七日あ一暮一夜まで二番又一夜
多て三番まで後宇治集あり

ゆく光る量をのりや川むらむ	古	岩白
正のくもなる木をてまき量う乳	系	漁藤
ふもよるくもよ優ちやてくる量	、	踏池
量とえて山のむら打くまう量	、	樹竹
たきまきの光りやもまふ量う乳	、	岳山
雑魚う陸し鏡を以新や飛ふ量	、	菅廣
暮下よる量よめあまを初量	、	園山
町も此量やまの海なるのち	、	暉糸

鳩の浮巢

鳩のまぐら地へ廣ありてくくむらむ	、	ちのち
物だぬ里の夜ふりくくふ量	、	木送
人を奪も初量くく量の量う乳	、	量西
量のまぐらのせき量なる量	、	下丹 芝蒸
飛ふ量をくく量のまぐら	、	飛飛 ぬ糸
くく量直ハ紺屋の物を一坊	、	是利 文窓
余の量れいあつてくく量浮巢	、	巨月
や志をくく鳩の量そのく浮巢	、	機鳥
量その量くくくむらき巢	、	松頂

鷹鳥屋三入

方角の志をぬ伯りやあく水鶴 子午池
若苗のつらき六りくも水鶴 留 色 出 月
月さそ田の川あくや晴くしあ、 露 考
別荘の板も明のゆて水鶴うぬ、 煙 仙
室社まの人も訪し暮る水鶴 水、 茶 味
人の聲も絶るあらや水鶴あく、 テハ 月 是
新緑ま若や水鶴の是たまり 風 什
言さす、 水鶴情やむ何くの雨 不 潔

【箋】鷹の四季よとて冬を対して春を暮暮の終りの毛
を易るよとて、夏を留る鷹のこめあくまの鳥の毛

鷹屋鷹くわい鷹の餅忘とるも此時のゆりて夏季あり
【贈】鷹のこめ、難あり句作よとて

鷹屋鷹のこめ、雨二日 峰 風

鷹屋鷹の中ら風志あつてあつて 巢 欣

毛をとり鷹のたのゆきをとりて 仙 月

毛をとりゆの鷹は深山の空にあり 波 月

羽抜鳥 毛をとりてあつてあつてあつてあつて 振 泉

風うまへん屋あつてあつてあつてあつて 影 池

清くくまの葉のまゝや羽抜鳥 金 春

身つてあつてあつてあつてあつてあつて 波 月

おくる日結う起はるしや羽抜る 山

そくく木よたあらふ影や羽ぬける 風竹

見逃すや吹矢の光はをぬきる 下サト外

晴るせは枝をもくをぬきる 花月

魚築打

石を堰本を陸へ魚の尾をまうてる物あり是を築打
と云築る竹をけりて竿をぬきりぬくや下サ外を離
るてやうよ志のくさあり魚の勢はは陸るゆり末をぬきりて
船中よりそを築る魚と云

築ちや揚場の尾をまうてる工更 佳節

山さうり木をぬきり船の味 下サ花月

船しりを聖日の花持る雇はる 分業

鮎

編まぐる舟のらとえら船のきり 舟南

船飛や次舟よ赤き西結出 菱堂

舟魚釣のまをてらうる筏のれ 葉弓

玉門よ光りて船の遊しう架 全 高妻

釣落き鯉のせりや水の隈 鳳眠

舟幸せり人小のせりる若の子 初出

舟しりる若のせりる若の子 舟南

舟しりる若のせりる若の子 風眠

舟しりる若のせりる若の子 末有

鹿の子

獸狩

初まきり親よ先まきり花子うめ、
志氣よあまきり月の花の子ハ 有壽
大粒の雨よなまきりつゝ麻の子ハ 乙朗
弓扱よえあまきり岨の花子うめハ 折翼
雨あまきり六親慕よめ花子の春ハ 暉光
簞をあまきり風よめ怖る花の子ハ 子布
おまきり山の藪よめまきり花の子ハ の洗
扇よめまきり花よめまきりこの子ハ 翠嵐
日く花にし男よめまきり獸ハ の里ハ 束花

鶺鴒狩

梢ゆく風よあまきり花を移しむ花 有山
花ゆく花をへりまきり花を移しむ花 花調
まつ風よ花のまきり花を移しむ花 葉居
町まきり星のまきり花を移しむ花 至願
罪あまきり知る花をのら花を移しむ花ハ 壽山
志まきり木の間よあまきり花を移しむ花 峰風
おまきり花の夜よまきり花を移しむ花ハ 月昇
おまきり花の夜よまきり花を移しむ花ハ 知足
おまきり花の夜よまきり花を移しむ花ハ 知足

照射

おまきり花の夜よまきり花を移しむ花ハ 知足
おまきり花の夜よまきり花を移しむ花ハ 知足
おまきり花の夜よまきり花を移しむ花ハ 知足

火^ホ串^シ

雨ふくむ雪やとをのきりりり 下サ 柳翠
宵雪の本の串よ沈む雪を 下毛 一糸
身をよせる本落もまた照射 テハ 海鏡
身よりのけりいさむを 下サ 以見
雨ふよを串のうらる 一 一字
見つたもくを串覗く 一 一
流川よふ串のや串のゆり ヒタチ 淇一
ふる陣板も急ぐぬ火く イハ 梧井
ふく 下毛 雲

墓^{キカ}

月のふり 下毛 出

は心もあらま 下毛 茶交
風雪の心を 一 一
吹易き 一 一
一 一 一
月の出 一 一
月 一 一
掃 下サ 外

い〜とめてゑる日めはしや草物 梅種
鼻車も袂もあそ〜 草を能 命 葉史
草を能海の夕葉うは里あり 下毛 富峰
地のみきあ〜りまり好まぬ草物 命 文種
端居〜を遊よぬせうり草のの、花調
結了居〜仕裁きせ帯り草を能、水篇
襦りける石の布とせしせとく物、玉山
さ〜〜さる結の〜う何り草物、紫契
結のらよあう見えたり草を能の 下毛 方衆

帷子

い〜う居の帷子さ〜〜 穀のうち 乙良
の〜印や板風のちむれさる里 美交
帷子や終よ着あせうねう〜 梅種
か〜印や板〜をい〜ふあり〜あり 上 毒松
あよあ〜る人の膚や白ち〜み 海了
は〜〜も色は〜〜の〜を〜この〜孔 命 市笠
あ〜〜と降りし海を過う〜花、 旧左
あ〜〜の〜る子の〜を〜あ〜過う花、 暑風

辻ヶ花

貞徳云つ〜うを〜と〜つ〜う花とのふりあり着き帷子
の〜りあせ〜は〜あよあ〜るなり

スモ

和のまきく自し佛や法一のを 古棠
交りのまきれ仙志一 辻このを水 山
志まきくくおしうつるや 下分 貴
らまきものや 膚よまける木のまき

水 黽

和のまきくくおしうつるや 膚よまける木のまき

和のまきくくおしうつるや 膚よまける木のまき

さく波をばくふゆりありある虫 種好

雨の日まきくくおしうつるや 膚よまける木のまき

鼓 蟲

和のまきくくおしうつるや 膚よまける木のまき

和のまきくくおしうつるや 膚よまける木のまき

波のうらまきくくおしうつるや 膚よまける木のまき

和のまきくくおしうつるや 膚よまける木のまき

蠟 子

和のまきくくおしうつるや 膚よまける木のまき

和のまきくくおしうつるや 膚よまける木のまき

和のまきくくおしうつるや 膚よまける木のまき

料理場や何のう揚る蠟子の飛 水 壺

蠟 子

和のまきくくおしうつるや 膚よまける木のまき

蠟 子

和のまきくくおしうつるや 膚よまける木のまき

翅身皆及をたまきさ
一かよふもたか

隙や海をさうりの水能うく

水壺

スモモ
蟻

うさちの蚕のおとくちをさきく身よりくちやつり
足短く毛有り木の根或ハ糞土の中よ生る者お若肉
黒一田芽屋上よ生るその外白く内うらみ色あり皆濕熱
の毒熏せり化生をさるる秋に入つ懐く蟻とある

草味のよきそのよてもはし

水壺

合歡の花

薔州うけ砂利階の席一極の花

文母

いさよせぬ板あり時あり云軟の毛

酒壺

六月

いさよのき・風納月・あつこの月・常夏月・林鐘・且月
・最月・留水・おちあ一月くいよ遠まをさつきとどろ
又六月うさち一早苗のうねりきくちあつこの月よあり身後
云は月律林鐘よりなるる月一を鐘の字よえまのうさちまら
を糸一のりめく刑よいも
あつこの誤あり増

六月や峰より雪あくらら

菊

六月ややうり多き夏りの空

古 蒼北

六月おちあつくさりのよ侍より

田 雲

六月も多結一夜の風鈴の音

△セ 文種

六月の思をさるる相川うれ

下サ 庭花

水無月

水無月や網ハ何れも増えら

菊

水室月の年うせし生島 古 去来

水室月の年うせし物せん富士の雪 凍 菖

水室月や夜も水はのり 氷 水

氷室

關 一日氷室清洞・氷のおまの・氷おまの・氷室の雪
・氷室の雪くら・氷解けし・貞徳云氷室の氷は四月一日
より九月までおまの・故と云ふ物あるも六月一日を肝要と用ふる
故と日又定るあり云云予今案し四月より・故と云ふは延喜式
に氷室のまの・勢月あるは四月より・氷を削るをまの
もの云とあり・源氏常夏反の書より・氷おまの・作り・数集
は氷室のまの・をまの・あり又氷室のまの・夏あり
まのまのの世伝を氷おまのを氷は准へて新月より用ひたる

開く日も裏白くく氷室う乳 古 梅 室

六月の蜜柑をせり氷室雪 古 言 水

氷室の雪を思ひて氷室は 尾 村

竹も木も動かさず氷室う乳 梅 巢

夏 氷

昨夏の氷は六葉輝や 氷 芳 州

氷室の雪は青や 氷 山 重

氷室の櫻

汗拭き氷室まのの雪の氷 古 子 委

忌日の御飯を供す

一日忌日と云ふ清の心をあらはしり月
忌神今食の由神よりをり始り
まの・内膳よりなりまのを大倉子の
御堂より供あり 古

きかんをやは換いしめぬ人なり、
文母
神園をやは二世とすも人の形を
早に
筆作

長刀鉾

七月、鉾、六本、山舟鉾、在、十七本あり、四月、は、角、筆、より、
順、行、の、罷、在、は、り、此、鉾、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
ハ、三、本、小、船、治、宗、近、の、形、より、素、瑞、
多、く、く、く、く、

鉾より、素、人の、形、を、し、も、初、う、り、古、其、角
鉾、の、の、見、や、土、色、の、雪、結、く、く、梅、室
お、宿、は、長、刀、鉾、の、見、く、く、子、壽
長、刀、の、鉾、や、神、め、く、人の、形、り
優、く

函谷鉾

月鉾

孟、掌、君、ら、故、り、あり、信、は、の、ん、あ、る、を、し、
い、い、あ、り、た、り、ま、り、
故、り、を、志、す、を、神、事、の、今、七、日、の、月、形、あり、
鉾、の、先、より、あり、

月鉾、や、松、原、西、へ、い、る、海、山、古、法、徳

月鉾、や、見、の、形、は、う、古、化、粧、
、
昔、良

鶏鉾

是、竟、の、代、は、鉾、の、為、は、大、枝、を、置、か、し、
た、り、あり、と、云、く、

鶏、鉾、や、対、の、告、さ、ふ、羽、の、この、子、人、
菊、葉、子

菊水鉾

放下鉾

岩戸山

是、九、月、九、日、は、菊、水、を、置、し、く、く、の、め、は、夜、病、を、の、く、
く、い、ふ、故、り、あり、
く、く、の、人、形、あり、信、は、ま、た、何、も、く、い、ふ、放下、鉾、の、
人、形、あり、た、り、あり、く、く、い、や、あり、
回、神、代、の、事、は、い、ろ、く、を、中、の、く、何、あ、つ、ち、い、お、ま、り、の、世、を、さ、り、く、く、
ま、り、の、世、を、く、く、子、を、の、子、は、ま、り、く、く、い、く、く、ま、り、の、世、を、

十四日

七日より旅へ出り小神楽を今日抵園の
本社へ之より奉りし事あり

槁辨慶山

是より十四日の山鉾あり山八本舟鉾一本あり半は丸五
条の檣より舟並と我ひりし事あり此山毎年籠りし

まゝ一
あり

鯉山

龍門の跡に鯉の
のりし事あり

浄妙山

宇治川の戦ひより東法沙首井浄妙の跡をおそく
船ありし事あり

黒主

古今の爲より此の山はもとありし事ありと昔より
はよりし事あり西行もよこしたる事あり

役行者山

大峯より役行者のうしろをく小角鬼神を従へり
つりし事あり

鈴鹿山

此山鈴鹿山の立鳥帽子より小鬼を
退治の事あり

鷹匠山

鷹匠の体あり人形三昧を部の人形檣をおひ標を
くわしありし事あり

観音山

山の上は楊柳観音あり
慈悲の徳あり

船鉾

神功皇后三韓征伐出陣時の事あり
毎年籠りし事あり

舟鉾やめし事あり

竹右

舟鉾やめし事あり

水

津島祭

津島半頭天王八尾延命海部郡門間の庄屋の事あり
十四日宵祭十五日朝祭是を里俗舟鉾といふ事あり

樂

船上の挑燈籠を二百六十箇一年の目敷を多し真柱の挑燈
十二巻八月の挑燈あり四傍の灯籠三十箇八月の敷あり宵祭を

是より
あり

うのくし事あり

水

勢田祭

十四日勢田神社其屋敷に玉を籠りし事あり
是よりし事あり

何となく何となく何となく
健を互に習しき 嘉 定 喉 文 里

茶の料よ是くぬめをせし赤気録、不由

かほり

陽女何何となくつうとなくのいんえり
あつとつういんえり通を中界つてのま

のつう 迎分あもあき 丁うぬ 葉 陸

伊勢の祭禮 十日度會をまつる十七日方林、是を奪ふとく
今日出立祭のなすれゆ祭儀ありむとあり

博多祭 十日十七日あり、祝儀あり
振田社ありあり

志度寺祭 十五日あり十七日まであり、横岐
補陀山志度寺ありあり

座頭の納涼 十九日志度寺のりしあり遊来はらへる納涼様
とて二月十日と今日まを執りまを雨夜の祝

王の母公退義の
選風あり

宵やも志ぬ中庭の涼とて 華子

富士詣 一日より廿日あり富士布ありありと
八月五日あり

月と目外ハアそそ不夜 詣 古 泉 池

お宿やとの間とあそそ 詣 智 函

身おのりそそあそそふ二詣、草史

覚悟より定むとそそ不二詣 下サト 外

り人をさそそあそそやそそ 詣、今 費

御手洗詣

乳のまじり十九日より廿日迄山懐に乳或ハ呂海より
書故より下鴨の社を乳の家と云此社本より山懐川

善持少の皆白妙や士峰 詣 泉外
叶外を口大いふくは一 詣 六 静 淵
不二詣世界あらもありの市里 八 如 水
あはれ我の走くくくくや一 詣 五 復
新風子身を清めくや不二詣 八 酒 系
眼のりくくく見く二日迄や一 詣 一 契 松
鉢巻もやうくくくくくや一 詣 台 多 由 儿
衣あひより 道連くやえく 不二詣 渭 水

ありて水まで清冷ありて溢れあひて後を修する
川七瀬の一ありて清人此後より臨を若さをさける

糺の納涼

神垣を出る 糺のまじり 渭 水

鞍馬の竹切

廿日紀より廿日釋峯 延鞍馬寺のまじりありて五月廿
六を備を日中大地より峰 延毘沙門の呪を誦す此
自ら斬らむと云ふありて毎年六月廿日村人業師 輩より集りて
大座の峰より云今もわく毎年六月廿日村人業師 輩より集りて
根ありて大座を修り建より別子大座休 二本堂の柱を修り撰
た法師二十人余白袴を著し 山刀をよあてて庭上より出り一本
の竹を近口と稱し一本の竹を丹波と稱し 法師各十人左右より
分別して考を著し山刀をぬき出せを切るを遅連よりありて
兩國の考を山をよく速く考を著し切るを遅連よりありて
考を著しよありて遅くよありてを截るを竹切と云地を斬る
遺法あり

竹切や帯よりくくくあちのくくく 考 枝 子

冬の日やえくまの川流新に何はし 三ツテ 徐達

川流しや志まき かくまき 小山 休 優

雨乞 雨乞ひのるる雲あまのころり雲が 古 木 州

雨乞や霧の川北おひくくま 玄子

るあまや峰の松風 岩ありのま 出 風

雨乞やまのふの池乃おひくくま 三 浦 交

雨乞の志まきや降る通る雨 俄 有

遠くまのこ雲雨乞のまあめくうれ 暮 生

愛宕千日詣 廿四日・橋立ノ祭 廿五日・座摩祭 廿三日
丹後 大阪

天満天神ノ御扱 廿五日是天は素也住吉あま

賀茂みふ月の能 晦日・住吉御扱 同日

唐崎参 ちひさたを唐をなまするや けり 賀茂の山手院ハ昔より御扱

の雲より住吉のいせにあまのき日向の國はあまをさう 系日御扱
一 後やまき 新まきまき 一 神 あまのあまのころり 崎ハ新院ありの
あまのころりさたの御扱よりあまのあり 係氏乙女の雲五首の唐を祀
よまをまらへせ 一 けりありのやまの事 新まきまき 今もあまの事
晦日よりあまの御扱よりあまの御扱

ちひさたを唐をなまするや けり 賀茂の山手院ハ昔より御扱 住吉

節折 國晦日休より主上の侍にまきの才法をさうりて中を極より

おひくくまの御扱よりあまのころり 雲あまのころり 雲が 古 木 州
年よりまきの御扱よりあまのころり 雲あまのころり 雲が 古 木 州
後をさうりてあまの御扱よりあまのころり 雲あまのころり 雲が 古 木 州
大 扱 晦日・御扱・川流し・夜まき・夕まき・後州・あまの
のちひさたを唐をなまするや けり 賀茂の山手院ハ昔より御扱

鷹羽遣を習ふ 月

羽つゝのしの自傳のあきふの里うれ

祐之

大暑の節

六月の 溽暑 チヨクシヨ
中あり

のりけに揚枝登る 暑きころ水

巨月

日の出より 暑き原の光りり草

古 卓池

芳くもてる 暑きまきのや敷のほ

芳 州

月の出るときのつきのの吐く水

香 森山

石のしき 塩場をの暑きう草

冷

州のあきよきや 暑きの水に乾く

荒 月

海にふんあくるを けつきのう水

賢 外

近きもの物のあきよき 暑き水

酒 我

菓の塩のあきよき 暑き水

イッ 五 夫

暑き日や 暑きのあきよき 人の影

アキレ の 五

舟をよせる 柱の暑き白しき水

風 付

舟のつら 舟の灯の風をえき

云 久 菜

鳥も 然る 過る けつきのう水

ハツ 文 托

あかり 暑き花も 暑き水 喉の涼

下サ 庭 を

炎 天

炎天よ 舟をよける けつきのう水

ハセ 山 雪

天貳節

書六日宋真宗祥符四年八月己未の酉一ノ月有言
を天祝ノ帝とせり

三 伏

夏五の後方三の庚の目を初伏といひ第四の庚を中伏
と云立秋の後庚の目を末伏と云り是を三伏と云ふなり夏ハ
史より秋を金あり夏は金より一陰生し一陰生する時金あり
金あり一陰生する時一陰生する時一陰生する時一陰生する時
伏日又万鬼行くと云終自末をともするなりと云り軍

土用子

鏡美々つこの世のためきん土用子 古 去来

たまたま現めくくく玉用子 占 彦子

我宿や後々の事くくく土用子 泉 茶舎

人多くくくくくくく日毎の土用子 上毛 心 墨

虫 子

志多し海よりき風おより土用子 下 文 志

虫中一や葉のまはまはくれく 在 尔

むしりやんまうむしり一寐入 氷 彦

虫をておくや一尾の虫をくく 佳 音

算

中ぬ・中ぬ人・神馬・たのむしりくくくくくくくくくくくく
山名うけりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

青嵐

風薫

百韻よ
あま

夏夜より風のそよよる結露なり 下サ 名 玖

夏やせをせぬもあまし思ひうれ ムサシ 名 圃

夏やせのしと書しや雨の音 三 交

秋の川も昔花の上をまきゆらし 文 種

青嵐に揺るぬ影を映せたり 貞 丈

南薫は月も吹涼風あり南薫は峰よりあふり水風海を
しるしとまじりしと幻住庵の記もあり又薫風自十中思と

風のよみ南よちのし 宿上川 菊

木の音や懐あらく風のそよ スヒ 東 花

青水

泉水

泉

雲の峯

水

青のしと霞葉よ風のそよけり 葵 丈

秋をなれぬ自しもあま風薫る 名 成

山もや海もえこえぬ風のそよ 雨 山

石隙をのあま風このそよあり 葉 欣

夏夜多雲峯と陶淵明の詩は有真意云六月照目の時
雲のそよよまき峰のそよあまを云り 留

木の音や懐あらく風のそよ 留 一 流

根を海をなれぬもあまし思ひうれ 留 名 芸

秋をなれぬ自しもあま風薫る 上 去 外

山もや海もえこえぬ風のそよ 金 板 佳

抄水

泉水

泉

泉をいふは清き水なり

泉の清き水なり

泉の清き水なり

泉の清き水なり

泉の清き水なり

泉の清き水なり

泉の清き水なり

泉の清き水なり

清き水なり

泉の清き水なり

泉の清き水なり

泉の清き水なり

泉の清き水なり

泉の清き水なり

泉の清き水なり

泉の清き水なり

泉の清き水なり

泉の清き水なり

浚之井

三月ノ井を浚らるるあり
又井戸のへとも云

後ノ井や釣籠おら共人のふる

下サ 菴水

さいし井や見あせぬ人の入交る

下サ 市笠

麻地酒

酒麻地酒は後必或は祀後の必り出せり此酒は酒類
茅かま合巻しそ冬を氷を用るこの酒は中子程と

竹葉の類も了度し程むとありそ冬を氷を用る夏中用ひて
土中よりいあせぬこの酒は熟せりさうすおろぐりて五月是
を貴概
せり

あつちのたきあめせぬや麻地酒 古 祖 知

旅あせりや中めさるる麻地酒 優

井あきや油をくく探らぬ 下サ 花 月

とつちのや造る油のあをさあふ 優

とああゆやや紫の梅の常ん 平 宮

醬造

増んうとこらてんそそのあり庭刑は西山の心ちと作るを
或はよま山の葉よ紫し七や八大根ありそ云り此を年その

後ノ酒を年も貴向あそ云梅しとつちの梅は
あつちの葉よこら心てんそよめり判の酒は是心ちをうまはく若

心太

振舞水

まろくまを也舞振舞水の下白を
まろくまやま舞水の人形なり
古 角

沖 鱈

沖鱈の夏は長き魚なり 沖 鱈
上 角

沖鱈の冬は短き魚なり 沖 鱈
下 角

岩陰を日陰にありて沖鱈なり
下 角

飯をぬぐふに別れに沖鱈なり
下 角

百日の沖鱈は魚なり 沖鱈
下 角

洗 鯉

洗をぬぐふ鯉は魚なり 洗 鯉
下 角

洗 鮎

洗をぬぐふ鮎は魚なり 洗 鮎
下 角

水 飯

水飯は水と飯の魚なり 水 飯
下 角

洗 飯

洗飯は洗と飯の魚なり 洗 飯
下 角

糲

糲は魚なり 糲
下 角

海月取

海月は海月の魚なり 海月取
下 角

干瓢剥

干瓢剥は干瓢の魚なり 干瓢剥
下 角

早 挑

早挑は早挑の魚なり 早挑
下 角

花の目をこぼす魚なり 早挑
下 角

林檎

味しの梨をいふところ林檎の形
優く

百日紅

蓮の葉は赤をばし花百日紅
下サ 玉清

思ふべき葉自のや百日紅
花岳

花籠のわらわの形を百日紅
思成

子と同一の形をの葉あり百日紅
八九輪

一枝の咲ありありあり百日紅
露光

瞿麥

やまのあそびのこころのあそび
川原接子・嶺南のま
あそびのこころ・常反英名

接子や接子の水きき花
△セシ 夢三

蓮ノ薔

接子や接子のあそびのあそび
上毛 白燕

接子のあそびのあそびのあそび
飛将

接子のあそびのあそびのあそび
水壺

接子のあそびのあそびのあそび
葉吹

蓮

接子のあそびのあそびのあそび
葉吹

接子のあそびのあそびのあそび
葉吹

接子のあそびのあそびのあそび
葉吹

接子のあそびのあそびのあそび
葉吹

蘭を折

新夕や影も久き残のこる 優く

青芒

青芒の影も久き残のこる 乙二

風蘭

福島をうけゆく産地ありし云々此の石の傍に生ずる
取身うす横欄の皮をそと色に樹下及び新木より生ずるハ
風をぬくく花葉をた風葉と名づく葉より生ずる葉志多し云
よたせらる上は月をを用く滋養あり

風葉や老のこれむ窓の光 龍得

眼皮

るる之れお玉臺や厚皮候 古 道彦

凌霄花

凌霄花の影も久き残のこる 乙良

凌霄花の影も久き残のこる 龍悦

日向葵

日向葵の影も久き残のこる

玉簪草

玉簪草の影も久き残のこる 優く

麒麟草

海名洋をいふ言々又斗葉葉景天より生ずる中ありて葉
は張りて花葉のり葉葉より花を生ずる花又景天
の葉をいふ言々

釣鐘

釣鐘の影も久き残のこる 葉雅

花

花の影も久き残のこる 秋之

花

花の影も久き残のこる 月よ女

花

花の影も久き残のこる 道彦

花

花の影も久き残のこる

瓜

青瓜・西瓜・水瓜・胡瓜・真菜瓜

出上る瓜やきりけりたる合 合 之 子

瓜をくちや聖日のお前を見せし 業 月

瓜揚ぐけりての瓜をくち 下 桶 下 庭 花

胡瓜

瓜の瓜の瓜の瓜の瓜 イ 瓜 瓜

真菜瓜

瓜の瓜の瓜の瓜の瓜 下 方 瓜

瓜の瓜の瓜の瓜の瓜 瓜 瓜

冷瓜

瓜の瓜の瓜の瓜の瓜 瓜 瓜

瓜の瓜の瓜の瓜の瓜 瓜 瓜

夕顔

ひきよの瓜

瓜の瓜の瓜の瓜の瓜 瓜 瓜

瓜の瓜の瓜の瓜の瓜 瓜 瓜

瓜の瓜の瓜の瓜の瓜 瓜 瓜

瓜の瓜の瓜の瓜の瓜 瓜 瓜

瓜の瓜の瓜の瓜の瓜 瓜 瓜

旋花

瓜の瓜の瓜の瓜の瓜 瓜 瓜

瓜の瓜の瓜の瓜の瓜 瓜 瓜

瓜の瓜の瓜の瓜の瓜 瓜 瓜

竹の皮取

しる敷やいさく能上よ嘆あまきるトサ 岩 瓊

ちうとあし目よききつうの竹の皮トサ 玉 瓊

物の糸引る後より竹の皮トサ 孤 瓊

却のふりてききつうの竹の皮トサ 素 月

むくもよききつうの竹の皮トサ 一 葉

葉のくせも竹の皮トサ 一 束

物より志きつうの竹の皮トサ 龍 得

川よりやぬきつうの竹の皮トサ 黄 山

川物のよりきつうの竹の皮トサ 露 光

川 狩

川物のよりきつうの竹の皮トサ 思 成

川のよりきつうの竹の皮トサ 峰 風

川のよりきつうの竹の皮トサ 峰 風

超トサ 鶴トサ
年 練雪雀凡の月毛をこのゆるを修ふ練雪雀うらうらふ毛を
あゆるとまきあゆむのをやうとまきあゆむうらうら毛を修ふは是れ
しる敷又或説は練雪雀と云ふ也
雪雀の異名ありと云ふ

花のよきつうの竹の皮トサ 素 月

山間や花のよきつうの竹の皮トサ 由 儀

花のよきつうの竹の皮トサ 花 葉

花のよきつうの竹の皮トサ 龍 得

蝉

蝉トサ
蝉のよきつうの竹の皮

雲雀鷹

雲雀鷹トサ

兜虫

蟬の人の方へさし入り 兜虫 一 重 後 友
あつむきや名をいふのき 兜虫 下 不 光

秋隣

まぬ秋・秋をり

秋近

川をちや秋を隣へもあふ風 一球
夕ぐせや秋ちうくあつむき 由 係
餘り州の河をり 芒の秋近 下 梅 近
蟬のほろあけり口をえて 蟬を 栄 吹

夏の雨

夏の雨よりあつむき 夜の雨を 白カハ 梅 泉

夏坐敷

秋蟬の佳きよきま

夏

山を海よりあつむき 山を夜をき 扇
海をり風の河をりやあつむき 下ハ 雪 山

夏ノ月

あつむきやまのあつむき 夏のあつむき 扇

あつむきのあつむき 夏のあつむき 扇
あつむきのあつむき 夏のあつむき 扇

あつむきのあつむき 夏のあつむき 扇
あつむきのあつむき 夏のあつむき 扇

あつむきのあつむき 夏のあつむき 扇
あつむきのあつむき 夏のあつむき 扇

あつむきのあつむき 夏のあつむき 扇
あつむきのあつむき 夏のあつむき 扇

中野郡

石塚邑

石塚堂